

| | | | |
|-------------|--|-----------------------------|------------------|
| 事業名称 | 「ABCモデル」による新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業 | | |
| 実行委員会 | 新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会 | | |
| 中核館 | 京都国立近代美術館 | | |
| | 住所 | 〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 26-1 | |
| | TEL | 075-761-4111 (代) | FAX 075-771-5792 |
| | ホームページ | https://www.momak.go.jp | |
| 構成団体 | 京都府立盲学校、国立民族学博物館、京都大学総合博物館、京都市立芸術大学、大阪教育大学、きょうと障害者文化芸術推進機構（京都府障害者支援課）、京都市文化市民局 | | |
| 事業開始時点の課題分析 | <p>京都国立近代美術館では2016年の「障害者差別解消法」の施行を機に、作品鑑賞の機会をより幅広い方に向けて提供することを目指し、視覚障害者に向けた鑑賞支援や、作品に「さわる」など障害の有無に関わらず誰もが享受できる鑑賞プログラムを構築する取り組みを2017年に立ち上げた。昨年度までの事業を通して、①障害当事者の参画があつてこそ従来の鑑賞方法の問い直しが起こること、②ワークショップ等を行うことで、多様な人が集い相互理解を深める場が生まれ、美術館が共生社会の実現に寄与するという成果を得た。</p> <p>これを踏まえ令和3年度からは新たに、障害者をプログラムの「受け手」ではなく、「作り手・発信者」として鑑賞プログラムの企画段階から協働する枠組みを構築する。現在、美術館と障害のある当事者が協働して鑑賞ワークショップや教材を制作している事例は全国的にも未だ少ない。他方で、東京パラリンピック大会を機に多様性や共生社会への関心が高まりつつあり、博物館法改正に向けたさまざまな議論にも見られるように、ミュージアムが多様な共同体と手を携えて社会的課題を解決していくことへの期待感が高まっていると言える。こうしたことから、美術館と障害者が持続的な協働関係を築きながら新たな鑑賞方法の開発を目指す先進的な実践を継続し、理念やノウハウの確立と全国的な普及を目指すべきであると考えている。</p> | | |
| 事業目的 | <p>本事業ではまず、誰もが楽しめる美術鑑賞プログラムを開発する枠組みとして、作家 (Artist:[A])、視覚障害のある方 (Blind/Partially Sighted:[B])、美術館の学芸員 (Curator:[C])の三者が協働する「ABCモデル」を構築する。従来の一方的な教育普及活動のあり方を超えて、インクルーシブ・デザインの視点も踏まえながら、障害を持つ当事者の感性を活かし、彼らが真の意味で美術館や美術作品を身近に感じられるようになることを目指す。</p> <p>具体的には、作家や視覚障害者の感性や専門性を取り入れながら、これまでにない新たな方法での①作品鑑賞ワークショップ、②ツール、③授業の新規開発を行う。</p> <p>そして上記の「ABCモデル」の理念・意義を全国に普及・展開させるために、事業成果をオンラインや冊子等で積極的に発信する。</p> | | |
| 事業概要 | <p>ユニバーサルな（誰もが楽しめる）鑑賞プログラムの開発のために、作家 (Artist:[A])、視覚障害のある方 (Blind/Partially Sighted:[B])、美術館の学芸員 (Curator:[C])の三者が協働する「ABCモデル」を構築し、以下3事業を実施する。</p> <p>(1) 所蔵作品の新しい鑑賞方法を提案するツールの開発 京都国立近代美術館の所蔵作品について、触覚や聴覚などを使う新たな鑑賞方法を提案するためのツール（教材やオンライン・コンテンツ）を開発し、一般に公開する。</p> <p>(2) 見えない人と見える人が共に楽しむ、所蔵作品の「触図」の開発 美術館の平面作品の形や構図をさわって知る「触図」について、彫刻家による半立体翻刻を行い、それを元にしたエンボス印刷を行う。1,000部制作し、全国の盲学校、ライトハウス、点字図書館を中心に配布する。</p> <p>(3) 盲学校における鑑賞教育の充実のためのモデル授業の開発 いまだ教授法やノウハウの確立に至っていない盲学校の図工・美術における「鑑賞教育」の現状を改善するため、所蔵作品を活用したモデル的な授業の開発を進める。</p> | | |

| | |
|----------------------------|--|
| <p>実施項目 ・ 実施体系</p> | <p>1. 障害のある方、作家、美術館が協働する「ABCモデル」による鑑賞プログラム開発</p> <p>(1) 所蔵作品の新しい鑑賞方法を提案するツールの開発</p> <p>①ABC三者で行う検討会議</p> <p>②作家 (Artist:[A]) によるツール制作</p> <p>③視覚障害者 (Blind/Partially Sighted:[B])による作品触察・検証</p> <p>④美術館 (Curator:[C]) での成果公開 (体験ブース・ワークショップ)</p> <p>(2) 見えない人と見える人が共に楽しむ、所蔵作品の「触図」の開発</p> <p>①ABC三者で行う検討会議</p> <p>②彫刻家[A]による作品の立体翻刻と印刷技術の検討</p> <p>③視覚障害者[B]による検証・作品解説テキストの作成</p> <p>④美術館[C]での成果公開 (トークセッション) と全国への配布</p> <p>(3) 盲学校と連携した、視覚障害児童・生徒を対象としたモデル授業の開発</p> <p>①ABC三者で行う授業プラン検討会と評価</p> <p>②ABC三者での授業実施</p> <p>③美術館[C]による、成果発信のための冊子制作と配布</p> <p>2. 「ABCモデル」の構築に向けた委員会の開催</p> <p>(1) 事業運営および事業評価を行うための委員会</p> |
| <p>実施後の 成果・効果等</p> | <p>本事業では、障害の有無に関わらず誰もが「さわる」「きく」などの身体感覚を用いて美術にアクセスできる鑑賞プログラム (ワークショップやツール) を開発するため、作家 (Artist[A]) ・視覚障害者 (Blind/ partially sighted[B]) ・美術館 (Curator[C]) の三者連携による「ABCモデル」を構築し、以下の取組みを行った。</p> <p>第一に、河井寛次郎をテーマに、見ることだけによらない新たな鑑賞プログラム「眼で聴き、耳で視る」の開発を行った (1 (1))。「さわる」「きく」という方法によって河井寛次郎の作品の特徴をこれまでとは異なる視点から読み解くものである。来場者が手でふれたり対話したりできる体験型の展示「眼で聴き、耳で視る 中村裕太が手さぐる河井寛次郎」を開催した。さらに、ABCそれぞれが語る音声を盛り込んだオンラインコンテンツ「ABCコレクション・データベース Vol.2 河井寛次郎を眼で聴き、耳で視る」の制作を行った。</p> <p>次に、見えない人と見える人がともに楽しむ「触図」の開発 (1 (2))として、京都国立近代美術館所蔵の竹内栖鳳《春雪》という日本画作品について、高いエンボス印刷技術を用いた「触図」(絵画の構図などを凹凸であらわした図)と解説文からなるツールを1,000部制作し、全国の盲学校・ライトハウスを中心に視覚障害のある当事者へ配布した。制作にあたっては彫刻家・印刷会社の技術スタッフ・全盲の研究者・美術館スタッフが連携した。そしてインクルーシブ・デザインの視点も踏まえ、彫刻家が制作した作品の模刻(半立体レリーフ)の検証、それを基にしたエンボス印刷のための原版制作とその検証、さらに印刷用紙の選定も、視覚障害のある方の意見をフィードバックしながら全員で制作を進めた。</p> <p>さらに事業の成果を広く発信するため、過去事業で構築した「さわる」鑑賞ワークショップを行った(全2回、参加者数52名)ほか、現代作家と連携し、障害の有無に関わらず身体感覚で楽しむ展示・ワークショップも実施した(ワークショップ参加者数14名)。</p> <p>※なお盲学校と連携したモデル授業の開発 (1 (3))については、対面で1つの作品に複数名で触れる・対話するという活動を前提に実施する可能性を探ったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、安全上の理由から次年度に実施を見送った。</p> |

【事業実績】

京都国立近代美術館を中核として、地域の大学、盲学校、作家、視覚障害のある当事者と協働しながら、視覚だけによらない、誰もが楽しめる美術鑑賞プログラム（ワークショップやツール）の開発を行った。協働の枠組みとして、作家[Artist]、視覚障害のある方[Blind/ Partially sighted]、美術館[Curator]が連携する「ABCモデル」を構築し、三者それぞれが専門性・感性を生かしながらプロジェクトに携わった。

事業ウェブサイト：<https://www.momak.go.jp/senses/>（制作したプログラムの概要や実践報告を公開）

■ 所蔵作品の新しい鑑賞方法を提案するツールの開発

昨年度のプロジェクト「ツボノナカハナンドロナ？」に引き続き、作家の中村裕太、視覚障害のある方と協働し、河井寛次郎（1890-1966）の作品について「さわる」「きく」「対話する」などの方法で理解を深めるプログラム「眼で聴き、耳で見る」を開発した。

河井寛次郎記念館の協力を得て、寛次郎の愛用品や本人がデザインした家具や物品等を視覚障害のある方が触れて鑑賞し、その音声を収録した。またそうした鑑賞体験に基づきながら中村氏が手でふれる作品を制作した。ふれる作品や音声等を用いた体験型の展示を美術館にて開催し、あわせて音声コンテンツを中心に構成したウェブサイトも制作した。



展示「眼で聴き、耳で見る | 中村裕太が手さぐる河井寛次郎」

2022年3月18日から、京都国立近代美術館4階コレクション・ギャラリーにて、来場者が「さわる」「きく」などの身体感覚をもちいて河井寛次郎の作品の特徴を味わう体験型の展示を行った。

会場では多様な年齢層の方が畳の上で造形物にふれ、時には来場者どうしで感想などを話し合いながら鑑賞を楽しむ様子が見られた。触覚を用いる鑑賞は、視覚による鑑賞よりも能動的に作品に関わることができ、本展示を通して、来場者自身が河井寛次郎の作品について主体的に考える機会を提供することができた。

また、点字新聞や視覚障害関係団体等への情報提供を積極的に行い、これまで来館機会がなかった見えない・見えにくい方にもこの機会に足を運んでいただけるような働きかけを行った。

(URL) <https://www.momak.go.jp/senses/edustudies2022.html>



オンラインコンテンツ「ABCコレクション・データベース Vol.2 河井寛次郎を眼で聴き、耳で見る」

(URL) <https://www.momak.go.jp/senses/abc/kanjiro>



河井寛次郎の仕事や暮らしについて、作家 (Artist) の声、視覚障害のある方 (Blind) が触察した音声、学芸員 (Curator) による座談会など、それぞれの切り口からひも解いた音声を中心に構成されるオンラインコンテンツ。



寛次郎がトランジスタラジオを枕元に置いて過ごしていたことからヒントを得て、さまざまな音声を通して河井寛次郎の暮らしぶりや人柄、考え方、関心などにふれることができる。

■ 見えない人と見える人がともに楽しむ触図「さわるコレクション」の開発

盲学校教育において図工・美術の点字教科書が無い現状等を踏まえ、一人でも多くの視覚障害のある方が美術に触れ、美術館への来館のきっかけとするため、所蔵作品を触る図と文章で紹介する「さわるコレクション」を制作した。図の加工にあたってはエンボス（浮き出し）加工技術を用い、竹内栖鳳《春雪》について、モチーフ（木製の舟やからすの羽根など）の質感、絵に描かれた風景を、触覚を通して思い描ける表現を目指した。

協働モデルとして、エンボス加工の版の元となる模刻（半立体レリーフ）を制作する彫刻家（A）、見えない方の美術鑑賞を研究している全盲の方（B）、印刷会社スタッフが協働し検討会議を重ねた。1,000部発行し、全国の盲学校・ライトハウス・点字図書館や美術館等へ配布した。



■ 身体感覚で楽しむプログラムの開催

「手だけが知ってる美術館 第4回 ふらっと鑑賞プログラム」

2021年7月・8月に、企画展「モダンクラフトクロニクル—京都国立近代美術館コレクションより—」にあわせ、野田睦美氏による手でふれることができる染織作品を用いて、参加者とスタッフが一対一で対話しながら鑑賞を進めるワークショップを開催した。（2回実施／参加者数52）



ワークショップ参加者の主な感想

○日頃、ほとんどを視覚に頼っているのかを実感しました。見る、見えることは確かに大切で、素晴らしいことではあるが、身体のままさまざまな感覚を使ってみることで、これまで気づかなかったことや、「何だろう」と想像することができました。（50代・男性）

○スタッフの方とお話ししながら自分の感覚で作品を理解していくというのはとても新鮮で、自分が思っていることと素材感が合っている、ちがっている、いろいろ考えさせられました。（30代・女性）

○作品をさわっている時に、良いタイミングで「まわして…」「もっと手をのばして…」と声をかけてもらった。手でみるのが進んだ。手でみるためにつくられたものでなく、ただ收藏されている作品をいかに鑑賞するかにも興味があります。また参加したいです。（30代・女性）

竹村京「Floating on the River」展示およびワークショップ

本事業の発展的展開を見据え、視覚障害のある方に限らず聴覚障害・精神障害のある方やそのご家族など多様な方が美術館へアクセスしやすくなることを目指し、文化庁による「CONNECT_{art}」事業への参画プログラムとして、2021年12月、作家・竹村京と連携した展示・ワークショップを実施した。作品の一部を誰もが手でふれて鑑賞できるように展示した。また、見えない人と見える人が共に参加するワークショップを開催した。（1回実施／参加者数14）

ワークショップ参加者の主な感想

○目の見えにくい方とご一緒だったので、物に対する扱い方や丁寧な時間を持ってました。（40代）

○壊れてすてられないモノほど、色々な思い出があるものなので、自分が持ってきたモノをこれからも大切にしようと思えたり、他の人のモノについても聞いて、形のあるモノをもっと大切にしていこうと思った。（20代）

○絹糸や蚕のお話をして下さったので、裁縫をしている間も、糸の一本一本に命を感じました。壊れてしまったもののその箇所を観察しながら糸を通したので、過去の記憶をたどったり、上手いかない糸の動きに苦労しながら不思議な気持ちになりました。（30代）

【CONNECT_{art}ウェブサイト】

<https://connect-art.jp/>

